

現代英語における譲歩を表す前置詞

—英語史研究の英語教育への貢献—

菊 地 翔 太*

1. はじめに

本研究の目的は、英語母語話者と日本人英語学習者における譲歩を表す前置詞 *despite* と *in spite of* の使用状況をコーパスを用いて比較分析することで、現代の英語教育で譲歩の前置詞について何が重点的に指導されるべきかに関して提言することである。具体的には、現代英語の通時的・共時的コーパス (COCA, COHA, Brown Family コーパス等) を用いて、英語史の視点から現代英語における譲歩の前置詞の使用状況を分析した後に、日本人英語学習者 (中高生・大学生) の作文コーパス (JEFLL, ICNALE) を用いて、日本人英語学習者の使用傾向を英語母語話者と比較しながら分析する。最後に、本研究で明らかにした日本人英語学習者の特徴に着目することで、譲歩の前置詞を指導する際の優先事項を提案する。

2. 先行研究

英語史における譲歩の前置詞の通時的な変化に関しては、コーパスを用いた研究がこれまでにいくつかなされている。代表的な研究としては、A Representative Corpus of Early English Registers (ARCHER) を用いて1650

*専修大学経済学部兼任講師

年から1990年の間の変化を調査した Rissanen (2002) や, Brown Family コーパスに基づき20世紀後半(1960年代から1990年代まで)の英米での使用状況を調査した田島(1994)や岩田(2001)が挙げられる。20世紀後半の譲歩の前置詞の使用を, 使用域やコロケーションの視点から調査した研究には, British National Corpus (BNC) を用いた Hoffman (2005) がある。最近の研究には, 様々なコーパスを用いて19世紀から21世紀までの譲歩の前置詞の使用頻度の変遷を調査した菊地(2014)がある。菊地(2014)は, 通時的・共時的視点から, 19世紀から21世紀にかけて起こった変化を, 使用域や語法・慣用法に着目して調査している。本研究では, 菊地(2014)に基づき, 現代英語で起こったと考えられる譲歩の前置詞に関する重要な変化を4節で紹介する。

最近の日本の英語史研究では, 「過去志向」の英語史の知識が「現代志向」の英語教育にどのように貢献しようかという問題が取り上げられることがあり, 二つの研究分野は一見すると接点がなさそうではあるが実は親和性が高いということが度々主張されている(古田2015; 寺澤近刊等)。この潮流は, 2014年5月に日本英文学会の第86回全国大会において, 「グローバル時代の英語教育-英語史からの貢献」というタイトルのシンポジウムが開催されたことから窺い知ることができる。また, 最近の英語史研究の動向として, 現代英語における現在進行中の変化への関心の高まりが挙げられる(Mair 2006; Leech et al. 2009等)。このような背景を踏まえると, これからの英語史研究では, 変容する現代英語における変化を射程に入れることにより, 現代英語を扱う「現代志向」の英語教育により大きな貢献ができるのではないだろうか。寺澤(近刊)は, 法助動詞と仮定法現在に関する現在進行中の変化を調査し, 現代英語の実情にかなった指導法を実証的に提案している。しかし, 筆者の知る限り, 本論で取り上げる譲歩の前置詞に関する変化に着目し, 実証的なデータに基づき英語教育に対して提案を投げかけるような研究はこれまで行われていない。

3. 方法

現代英語における譲歩の前置詞の使用状況に関しては、前節で紹介した菊地（2014）の調査結果を引用する。通時的変化を概観する際には、1960年代から2000年代までの英米での言語変化を調査する際に有用な Brown Family コーパスと、1810年から2009年までの約200年間をカバーする4億語の大規模なアメリカ英語のコーパス Corpus of Historical American English (COHA) の調査結果を紹介する。¹ 現代英語における使用域毎の違いを共時的に観察する際には、1990年から2012年までのアメリカ英語のコーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA) と1980年代から1993年までのイギリス英語の資料から成る British National Corpus (BNC) の調査結果を示す。² これら二つのコーパスには話し言葉のデータも含まれているので、話し言葉と書き言葉の比較が可能である。

日本人英語学習者の英語使用の調査には、Japanese EFL Learner Corpus (JEFLL) と International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) を用いた。JEFLL は日本人中高生1万人の英作文を集めた約70万語弱の学習者コーパスで、論説文と叙述文の二つの作文のタイプから構成されている。ICNALE はアジア10カ国の2600人の大学生と200人の英語母語話者によるエッセイを集めた約130万語のコーパスであり、日本人学習者のサブコーパスは400人による計800のエッセイ（約18万語）を収録している。どちらのコーパスも辞書の使用を禁止しているという点では共通しているが、JEFLL ではどうしても英語で言いたいことが書けない場合に限り日本語の使用を許可している。³

4. 現代英語における譲歩の前置詞の使用状況

本節では、菊地（2014）の研究結果の概要を紹介し、現代英語における譲歩の前置詞の実態を概観する。COHAにおける譲歩の前置詞の使用頻度の変遷を示した図1によると、19世紀には、かつて優勢であった *notwithstanding* が頻度を落とし、*in spite of* が台頭するという大きな変化が起こっている。⁴ 20世紀に目を向けると、*in spite of* が1910年以降一貫して頻度を落とす一方、前世紀にはあまり用いられていなかった *despite* が着実に頻度を増し、1940年代には両形態の形勢が逆転している。20世紀の後半にも *despite* は頻度を増し、2000年代にはかつて優勢であった二形態を圧倒する頻度で使用されていることが見て取れる。

この変化が英米両変種でどのように進んでいったのかを知るために、Brown Family コーパスに基づきアメリカ英語のデータを示した表1とイギリス英語のデータを示した表2を確認したい。⁵ 20世紀に起こった *despite* と *in spite of* の頻度の逆転は、イギリス英語よりもアメリカ英語で先に起こったと考えられ、1961年と1991/1992年にはイギリス英語が *despite* の導入に遅れを取っていたために英米差が観察されたが、2000年代には両変種の差はほとんど消滅しているようである。⁶

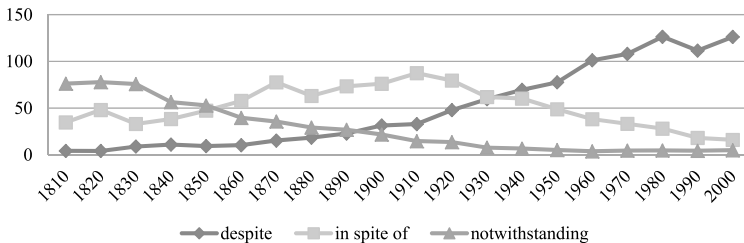


図1. COHAにおける譲歩の前置詞（100万語あたりの語数）（菊地2014：6）

表 1. アメリカ英語における despite と in spite of の使用頻度の変化（菊地 2014：6 一部改変）

	Brown (1961)	Frown (1991)	AmE06 (2006)
despite	104 (66.7%)	122 (86.5%)	167 (87.0%)
in spite of	52 (33.3%)	19 (13.5%)	25 (13.0%)

表 2. イギリス英語における despite と in spite of の使用頻度の変化（菊地 2014：6 一部改変）

	LOB (1961)	FLOB (1992)	BE06 (2006)
despite	74 (48.4%)	131 (74.0%)	169 (92.9%)
in spite of	79 (51.6%)	46 (26.0%)	13 (7.1%)

表 3. COCA, BNC における譲歩の前置詞（菊地2014：9 一部改変）

(abs = 絶対数, pmw = 100万語あたりの語数, % = 全体（3種類の前置詞）に占める割合）

	despite			in spite of			notwithstanding		
	abs	pmw	%	abs	pmw	%	abs	pmw	%
COCA Spoken	6016	62.94	84.6%	824	8.62	11.6%	271	2.84	3.8%
Fiction	7752	85.72	77.9%	1960	21.67	19.7%	238	2.63	2.4%
Magazine	13375	139.97	88.4%	1200	12.56	7.9%	549	5.75	3.6%
Newspaper	14979	163.32	93.0%	671	7.32	4.2%	450	4.91	2.8%
Academic	17197	188.84	82.8%	2396	26.31	11.5%	1174	12.89	5.7%
BNC Spoken	220	22.08	77.7%	44	4.42	15.6%	19	1.91	6.7%
Fiction	1447	90.95	68.4%	635	39.98	30.1%	32	2.01	1.5%
Magazine	1238	170.48	89.5%	113	15.56	8.2%	33	4.54	2.4%
Newspaper	2507	239.53	89.3%	284	27.13	10.1%	18	1.72	0.6%
Non-acad	3102	188.05	83.6%	490	29.71	13.2%	118	7.15	3.2%
Academic	2745	179.04	78.6%	454	29.61	13.0%	295	19.24	8.4%
Misc	2878	138.13	78.6%	586	28.13	16.0%	199	9.55	5.4%

語法書や文法書の中には, despite を形式ばった語であると記述しているものもあるが, 使用域による違いはあるのだろうか。⁷ COCA (1990年から2012年までのアメリカ英語のコーパス) と BNC (1980年代から1993

年までのイギリス英語のコーパス)に基づき、使用域毎の使用状況を示した表3によると、現代英語では話し言葉を含むどのジャンルにおいても despite が最も使用頻度の高い譲歩の前置詞であることがわかる。

これまでの調査結果を踏まえると、despite は現代の英米両変種においてジャンルにかかわらず最も頻出する前置詞なので、英語学習者が最も優先して覚えるべき譲歩の前置詞が despite であることは明らかである。英語教育において despite と in spite of が同等に用いられるかのように扱われているとしたら、あるいは、in spite ofの方が標準的な形態であるとみなされているとしたら、それは問題であろう。in spite of は despite の同義表現として参考程度に扱われるべきである。村田(2005:110)は、主に読解のための受容文法(receptive grammar)と、表現のための産出文法(productive grammar)を区別して文法事項を整理することを提案しているが、現代では極めて使用頻度が低い in spite of は、受容文法事項として大学以降の英語教育で扱われるべきではないだろうか。

5. 英語母語話者と日本人英語学習者における譲歩の前置詞の使用の比較

本節では、前節の調査結果を踏まえて、日本人英語学習者がどのように譲歩の前置詞を使用しているかを詳細に見ていく。表4は比較のために、日本人の調査結果だけでなく ICNALE における英語母語話者の調査結果

表4. 日本人英語学習者と英語母語話者における despite と in spite of の使用頻度

	despite	in spite of
中高生 (JEFLL)	3 (12.5%)	*21 (87.5%)
大学生 (ICNALE)	3 (15.0%)	17 (85.0%)
母語話者 (ICNALE)	1 (100%)	0 (0.0%)

*inspite of が一例含まれている。

も載せている。⁸

日本人英語学習者は、中高生・大学生共に、現代では廃れかかっている *in spite of* を、*despite* をかなり上回る頻度で過剰使用していることが明らかになった。⁹ 驚くべきことに、*in spite of* の頻度はどちらの学習者層でも85%を上回っており、現代英語における使用状況とは大きく乖離している。譲歩の前置詞の使用に関して言えば、日本人英語学習者の英語は、100年以上前の19世紀末の英語に非常に類似しており、英語母語話者に不自然な印象を持たれても不思議ではないかもしれない。

次に、日本人英語学習者が規範文法的に正しく譲歩の前置詞を使用しているかどうかに着目して使用例を分析する。本研究では、用例を「正用法」と「誤用法」の二つに分類する。正用法は、以下の例文（1）から（3）が示すように、譲歩の前置詞が、規範文法的に正しく前置詞として使用されており、目的語に名詞（代名詞や動名詞を含む）を取る場合と定義する。¹⁰ 正用法の定義から外れた用例は誤用法と判断する。表5に正用法と誤用法の頻度を示す。

- (1) *In spite of* this advice, he was smoking every day. (ICNALE)
- (2) I always sit up late at night and don't get up early. So I have little time for eating breakfast. *In spite of* that I always eat much. (JEFLL)
- (3) If we don't ban smoking clearly, some people will smoke at a restaurant *in spite of* knowing that many people hate it. (ICNALE)

日本人英語学習者は学習者層にかかわらず、20%以上の頻度で譲歩の前置詞を誤用していることが見て取ることができる。以下、どのような誤用が多いのか実際の使用例を見ながら確認していきたい。

最も多く観察された誤用は、譲歩の前置詞を従属接続詞として使用する

表5. 日本人英語学習者と英語母語話者における譲歩の前置詞の正用法と誤用法の頻度

	正用法	誤用法
中高生 (JEFL)	19 (79.2%)	5 (20.8%)
大学生 (ICNALE)	15 (75.0%)	5 (25.0%)
母語話者 (ICNALE)	1 (100%)	0 (0.0%)

品詞の混同であり、日本人英語学習者は *despite* や *in spite of* が「前置詞」であるということをしかりと理解していないようだった。(4)から(6)では、*despite* は文を支配しており、従属接続詞の *although* や *though* のような機能で使用されている。従属接続詞の使い方に関する理解も不完全なのか、(5)と(6)ではカンマではなくピリオドの後に *despite* の誤用が観察されることも注目すべき点である。¹¹ *in spite of* の場合にも同様に、(7)から(10)のような従属接続詞としての誤用が見られた。(9)と(10)は譲歩の前置詞が *that* 節を目的語に取る誤用であるが、(10)では *in spite of* の *of* が欠落している。

対照的に、日本人英語学習者のデータには、(11)のように従属接続詞の *although* が前置詞として使用されているような用例も含まれている。また、譲歩表現以外でも、(12)のように従属接続詞の *while* が前置詞のように使用されている例や、(13)のように前置詞の *during* が従属接続詞として使用されているような用例も観察された。この種の誤用は、前置詞と従属接続詞の機能に関する日本人英語学習者の理解の不十分さに起因しているように思われる。

(4) But I am completely satisfied with that experience *despite* I didn't feel the atmosphere of the festival. (JEFL)

(5) But non smoker's right is lighter than smoker's one. Smoker's can

- smoke almost every where every time. *Despite* smoker can control their desire short time like class. If they wanted to smoke, they can go to smoking place after eating meal soon. (ICNALE)
- (6) But my mother serves me rice and [JP: 味噌汁] every day. *despite* she knows which I prefer. (JEFLL)
- (7) And if we enter a restaurant, we often see a situation that a lot of people wait for nonsmoking seats *in spite of* smoking seats are vacant. (ICNALE)
- (8) But my collection is very priceless for me *in spite of* some one think that they are worthless. (JEFLL)
- (9) Just then, I smelled the disagreeable odor of the smoke *in spite of* that I ate delicious foods. (ICNALE)
- (10) For these reasons, I don't agree to ban smoking at restaurants completely, *in spite* that I don't smoke. (ICNALE)
- (11) On festival day, badly it was rain and cold. So we worried that our food don't sell. But!! *Although* the bad weather, our foods were sold very much!! (JEFLL)
- (12) Now I don't have Otoshidama, because [sic] I used OTOSHIDAMA *while* winter vacations. (JEFLL)
- (13) I can't think that though they are heavy smoker they can't stand to smoke for only 1 or 2 hours *during* they eat. (ICNALE)

譲歩の前置詞の誤用の例には、*despite* と *in spite of* を混同した例も含まれている。(14) では、*in spite of* との混同からか、*despite* に余計な *of* が後続している。(15) では、おそらく *despite* との類推により、*in spite of* の *in spite* が一語として綴られている。¹²

- (14) When I was in the city, I heard someone been killed by a gun. Strangely I thought I was a target. Who was the killer if it was true? And *despite of* my will, my legs were heavy and the road was complicated. At last I was shoot by the killer. As soon as I died I woke up. (JEFL)
- (15) At last we were fail, when we got [JP:nainn] points. *Inspite of* our fail, I was satisfied with this result, and I thought my [JP:pa-tona-] felt [JP:onaji_you_ni], too. (JEFL)

その他の誤用には、in spite ofの目的語の位置に動名詞ではなく動詞の原形が使われている (16) の例が見られた。

- (16) And they begin to be interested in smoke, *in spite of* be under 20, they could begin to smoke. (ICNALE)

ここまでは譲歩の前置詞が文法的に正しく前置詞として使用されているかどうかに着目して正用か誤用かを判断したが、上で見た「正用法」に含まれる例の中には、譲歩の前置詞の後に目的語として名詞が正しく使われているが、英語母語話者が違和感を覚えるような誤用とも取れる使用例が見られる。in spite ofが使用されている (17) がその代表例である。¹³ 問題なのはdespiteの代わりにin spite ofが使用されていることではなく、in spite ofの使用のされ方である。(17)の“in spite of nonsmokers”は、「私達は非喫煙者であるにもかかわらず」という内容を意図していると考えられるが、“nonsmokers”と主節の“we”が同格であるという解釈はこの譲歩表現の文字通りの解釈ではないだろう。この文の書き手である学習者の意図に反して、「非喫煙者を蔑ろにして」といった意味で解釈されてしまう可能性がある。この学習者が意図した意味を表すには、動名詞を用いて in

spite of being nonsmokers とするなど、他の書き方を選択する必要があるだろう。

- (17) If we eat dinner with smokers, *in spite of* nonsmokers we may suffer from a serious disease that is caused by smoking. (ICNALE)

日本人英語学習者は、英語母語話者とは異なり、廃れた表現である *in spite of* を頻繁に使用することや譲歩の前置詞の使用に関する間違いが多いことがここまでの調査で判明した。譲歩表現全体の使用傾向に関しても、日本人英語学習者と英語母語話者の間には大きな違いがあることが図2と表6から読み取れる。以下の図表では、譲歩を表す際に使う語として、前置詞 (*despite* と *in spite of*) と従属接続詞 (*although* と *though*) を取り上げた。ICNALE では、英語母語話者のデータ (ENS1) のサイズは日本人英語学習者のおよそ四分の一なので (100人による200のエッセイ)、以下の図2では英語母語話者の用例数は4倍にして示している。

図2から、日本人英語学習者は英語母語話者よりも譲歩を表す語を使用

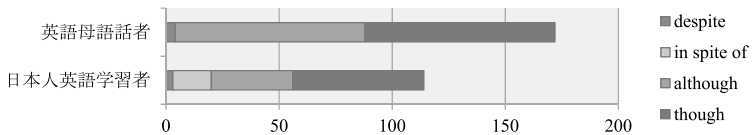


図2. ICNALE における譲歩表現の使用頻度

表6. ICNALE における譲歩表現の使用頻度¹⁴

	despite	in spite of	although	though	合計
英語母語話者	1 (2.3%)	0 (0.0%)	21(48.8%)	21(48.8%)	43(100%)
日本人英語学習者	3 (2.6%)	17(14.9%)	36(31.6%)	58(50.9%)	114(100%)

する頻度が少ないことが明らかだが、これは日本人英語学習者が譲歩表現を上手く活用していないことを物語っているかもしれない。¹⁵ しかし、最も注目すべき違いは、日本人英語学習者は譲歩を表す際に前置詞を過剰使用しているという点である。前置詞 (despite と in spite of) と従属接続詞 (although と though) の二つに分類した図 3 によると、英語母語話者が前置詞を使用する割合は約 2% だが、日本人英語学習者は約 8 倍の頻度で前置詞表現を用いている。¹⁶ Biber et al. (1999: 788) も述べているように、譲歩を表す副詞表現には定型節を用いるのが最も一般的であるので、日本人英語学習者が優先的に習得すべきなのは、従属接続詞を用いた譲歩表現の産出方法であると考えられる。例えば、上で挙げた (17) の in spite of nonsmokers は (al) though we are nonsmokers に書き換えが可能であり、従属節を用いた表現の方が初級学習者にとって産出しやすいだけでなく、意味が明瞭である。

本節が明らかにした日本人英語学習者の特徴をまとめると以下の通りである。日本人英語学習者は、英語母語話者と比べると譲歩を表す際に前置詞を過剰使用する傾向がある。また、その際に使用する前置詞は、現代では使用頻度が極めて低い in spite of であることが大半である。前置詞の使用時には、20%以上の頻度で使用法を誤っており、前置詞と従属接続詞の混同や綴りの混同等の誤用が観察された。

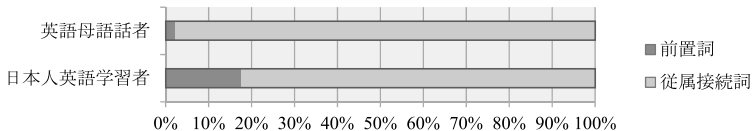


図 3. ICNALE における譲歩表現の品詞別割合

6. おわりに—英語教育への提言—

本研究は英語教育へ以下の提言をする。

第一に、英語教育では譲歩の前置詞を扱う際に *despite* を重点的に指導すべきである。*in spite of* は廃れかかっている表現であり、現代英語における重要性は今後も下がっていく一方であると予想されるので、高等教育の授業（特に読解に焦点を当てた授業）において補足的に説明する程度でよいのではないだろうか。現代では、*notwithstanding* と同様に、中高で扱う必要がある程の重要表現ではないと思われる。*in spite of* を指導しないという方針を採用すれば、*despite* と *in spite of* を混同した綴り上の間違いが減少する可能性があるという点でもメリットがあるかもしれない。しかし、高い水準の英文の読み書きが今後求められるであろうレベルの学生（例えば英語専攻の学生等）に対しては、*despite* の同義表現として *in spite of* という形態があることを説明したほうが望ましいだろう。

第二に、*despite* の使い方を指導する際には、従属接続詞の *although* や *though* との違いを強調すべきである。日本人英語学習者は、譲歩を表す際に前置詞を過剰使用し、且つ使用法を誤る傾向があるので、まずは従属接続詞を用いた文をしっかりと産出できるように訓練するような指導法が望ましいのではないだろうか。前置詞の *despite* を最大限に使いこなすには、初級学習者にとってはハードルが高い名詞構文の理解も不可欠であるため、従属接続詞を用いた譲歩表現の方が遥かに習得しやすいと考えられる。例えば、「雨が酷く降ったのにもかかわらず」ということを伝えたい場合には、まずは従属接続詞を用いた (a) *though it rained heavily* がしっかりと産出できるようになることが重要である。その次のステップとして、前置詞と名詞構文を用いた *despite the heavy rain* という言い方があることを指導すべきではないだろうか。その一方で、名詞構文を使用

することには文体の格調を高める効果があるので（古田2015：56-58），前置詞 *despite* を用いた譲歩表現は，大学のアカデミックライティングの授業では積極的に取り上げられる必要があるだろう。

最後に，大学入試問題や各種英語検定試験において，*in spite of* が重要な表現として未だに出題されているという現状は見直されるべきではないだろうか。例えば，大学入試センター試験の過去10年分（2005年度から2014年度まで）の本試験を調査してみると，過去10年では2回 *in spite of* が現れているが，いずれの問題もこの群前置詞の意味がわかっていることを前提としているような問題である。2005年度の問題では，（18）で示した文章の並べ替え問題で，2012年度の問題では，（19）で示した文法・語法問題で *in spite of* が使われている。センター試験においては未だに *in spite of* が重要な表現として扱われているようだが，現代英語の実態を考えると時代錯誤に思える。¹⁷

（18）2005年 大問3B 問1

Did you know that things as small as leaves can delay trains?
When leaves fall onto the tracks they can cause wheels to slip and then the brakes may not work properly. [28] They claim that it could blast leaves away easily and quickly.

A. Some scientists suggest that a laser device fitted onto the front of a train might solve the problem.

B. *In spite of* such efforts, trains are sometimes delayed for long periods of time.

C. In some areas, those leaves have to be removed by an army of cleaners.

（19）2012年 大問2A 問2

Could you show me how to make my mobile phone ring differently,

() who's calling me?

- ① depending on ② *in spite of* ③ on behalf of ④ relying on

このような背景を踏まえ、「変容する現代英語」という視点から英語教育をアップデートしていく必要があると強く考えている。本研究では譲歩の前置詞に限定したが、今後は他の文法事項も調査の対象にすることで、英語史研究者として、また英語教師として、英語教育の改善に貢献できればと思っている。

参考文献

- 岩田幸子. 2001. 「コーパスに基づく despite と in spite of の語法研究」『Athena』34 : 27-42.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』改訂三版 東京：金子書房.
- 菊地翔太. 2014. 「現代英語における譲歩を表す前置詞—コーパスに基づいた通時的・共時的的研究—」*Komaba Language Association Journal* 1: 1-16.
<https://sites.google.com/site/komabalanguage/kla-journal/kla-journal-volume-1>
- 田島松二. 1994. 「コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究 (7)—despite と in spite of—」『英語英文学論叢』44 : 125-136.
- 寺澤盾. 近刊. 「変容する現代英語—英語史と英語教育の接点」『関東英文学研究』8.
- 投野由紀夫, 金子朝子, 杉浦正利, 和泉絵美 (編). 2013. 『英語学習者コーパス活用ハンドブック』東京：大修館書店.
- 古田直肇. 2015. 『英文法は役に立つ! 英語をもっと深く知りたい人のために』横浜：春風社
- 村田純一. 2005. 「変容する英語と学校英文法」菅山謙正 (編) 『変容する英語』京都：世界思想社. 87-115.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Hoffman, Sebastian. 2005. *Grammaticalization and English Complex Prepositions: A Corpus-Based Study*. New York: Routledge.
- Ishikawa, Shin'ichiro. 2013. "The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English." *Learner Corpus Studies in Asia and the World* 1: 91-118.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair, and Nicholas Smith. 2009. *Change in*

- Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mair, Christian. 2006. *Twentieth-Century English: History, Variation and Standardization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rissanen, Matti. 2002. "Despite or notwithstanding? On the development of concessive prepositions in English." In Andreas Fischer, Gunnel Tottie and Hans Martin Lehmann, eds. *Text Types and Corpora: Studies in Honour of Udo Fries*. Tübingen: Gunter Narr Verlag. 191-203.
- Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

コーパス

- The American English 2006 corpus (AmE06)* Available online at <https://cqpweb.lancs.ac.uk/ame06/>.
- The British English 2006 corpus (BE06)* . Available online at <https://cqpweb.lancs.ac.uk/be2006/>.
- British National Corpus (BYU-BNC): 100 million words, 1980s-1993*. Available online at <http://corpus.byu.edu/bnc/>.
- The Corpus of Contemporary American English (COCA): 400+ million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810-2009*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coha/>.
- International Corpus Network of Asian Learners English (ICNALE)* Available online at <http://language.sakura.ne.jp/icnale/>.
- The JEFLL (Japanese EFL Learner) Corpus*. Available online at <http://scn.jkn21.com/~jeffl03/>.

注

- 1) 本稿で使用されている英語の通時的・共時的コーパスに関しては, Corpus Resource Database (CoRD) (<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/>) に詳しい。
- 2) 菊地 (2014) では Google Books コーパスや TIME コーパス等のコーパスも調査しているが, 本論では議論に直接的に関係があるコーパスの調査結果のみを紹介する。
- 3) JEFLL や ICNALE 等の日本人英語学習者のコーパスに関しては, 投野他編 (2013) を参照。
- 4) 19世紀以前の譲歩の前置詞の使用に関しては, Rissanen (2002) を参照。
- 5) 菊地 (2014) では, 1960年代の Brown と LOB, 1990年代の Frown と FLOB の調査結果は, 田島 (1994) と岩田 (2001) から引用している。また, 菊地 (2014) は,

AmE06とBE06が著作権の関係で公開されていないなかったため、編纂者のPaul Baker教授のHPで公開されている頻度リストに基づいて、それぞれの形態の頻度を示した。しかし、その後、ランカスター大学のCQP Webで両コーパスが利用可能になったため、本稿では頻度リストを用いずにコーパスから直接頻度を抽出した。菊池（2014：6）のin spite ofの数値は、頻度リストにおけるspiteの頻度に基づいているため、菊池（2014）と本稿ではin spite ofの数値に多少のずれがある。詳しくは菊池（2014）の注8を参照。

- 6) カイ二乗検定（イェーツ補正）を行った結果、1961年と1991/1992年には、despiteとin spite ofの頻度に関して、英米間に有意水準1%で差があったが(1961年 $\chi^2=9.86$, $df=1$, $p<.01$; 1991/1992年 $\chi^2=6.81$, $df=1$, $p<.01$), 2006年には有意差が認められなかった(2006年 $\chi^2=1.86$, $df=1$, $p=.17$)。
- 7) Quirk et al.(1985), 江川 (1991), Swan (2005) 等参照。
- 8) ICNALEの英語母語話者のコーパス(ENS)は、大学生100人のデータを収録したENS1と大学生以外の100人のデータを収録したENS2の二つのサブコーパスから構成されている。ICNALEの編者であるIshikawa(2013)は、英語学習者とネイティブスピーカーを比較する際には、ENS1を使用するのが適していると述べているので、本研究ではENS1のみを調査対象とした。
- 9) JEFLLのデータには中学生が譲歩の前置詞を使用している例は観察されなかった。
- 10) 本論では例文中のイタリックは全て筆者によるものである。
- 11) (5)と(6)では、despiteはピリオドの後に使用されているので、howeverのような副詞として誤用されている可能性もあるかもしれない。
- 12) 同じく群前置詞であるinstead ofとの類推が働いた可能性もあるかもしれない。
- 13) 全体の用例数の少なさもあり、despiteには同様の例は観察されなかった。
- 14) 前置詞と従属接続詞の使用に焦点を当てるため、副詞として使用されているthoughは調査の対象外とした。また、日本人英語学習者のthoughの用例からは、thoughtやthrough等のスペルが似た語を書き間違えて使用されている例は除外している。
- 15) 日本人英語学習者は譲歩を表す際に、前置詞や従属接続詞以外の語（等位接続詞のbutや副詞のhowever等）を好んでいる可能性もあるが、本論では、文中で副詞句・節を導く前置詞と従属接続詞に調査対象を限定した。
- 16) 前節で見たように、日本人英語学習者の譲歩の前置詞の使用例には接続詞としての誤用も含まれているが、それらの用例を除いたとしても、日本人英語学習者が前置詞表現を過剰使用しているという傾向に変わりはない。
- 17) 参考までに、過去10年のセンター試験においてdespiteは計5回使用されていた。